

「父親の役割」の概念分析

著者	阿川 勇太, 中山 美由紀
引用	大阪府立大学看護学雑誌. 2020, 26 (1), P.9-17
URL	http://doi.org/10.24729/00016799

研究報告

「父親の役割」の概念分析

A Concept Analysis of Father's Role

阿川勇太¹⁾・中山美由紀²⁾

Yuta Agawa, Miyuki Nakayama

キーワード：父親，役割，概念分析

Keywords: father, role, concept analysis

Abstract

The purpose of this concept analysis was to clarify the concept of “father’s role” by reviewing the literature and examining its characteristics. Using PubMed, CINAHL, Ichushi-Web and Google as data sources, a search was conducted using the key words “father” and “role”, restrictions to father’s role in childhood disability or illness. A total of 45 articles related to the father’s role were selected, and a concept analysis was performed with reference to Rodgers’s technique. The analysis classified three antecedents, five consequences and five attributes as “response to historical changes in social norms”, “encouragement for family structure”, “adjustment of conflict as father”, “intimating and co-parenting in the couple”, “responsibility and involvement in the relationship of father-child”. The father’s role was defined as follows: “Keeping on involvement at each level within the family structure, with responsibilities even when struggling as a father and, at the same time, responding to broader societal demands”. This definition could be used to support the acquisition of the father’s role early.

抄 録

本研究は、「父親の役割」という概念が現代ではどのように用いられているのかを明らかにし、その特徴と父親の役割獲得に向けた支援への概念活用の有用性について検討することを目的とした。CINAHL, PubMed, 医中誌Web, CiNii, Google scholarを使用し、キーワードを「Father」と「role」, 「父親」と「役割」としてそれぞれ検索した。検索の結果、45文献を対象とした。属性は【歴史的社会変化への応答】【家族システムへの働きかけ】【父親としての葛藤の調整】【夫婦関係における寄り添いと協働】【父子関係における主体的な関わりと責任】の5カテゴリーが導き出され、先行要件は3カテゴリー、帰結は5カテゴリーが導き出された。「父親の役割」は「家族システム内に存在する夫婦関係や父子関係に対し、社会の要請にも応答しつつ、父親として葛藤しながらも責任を持って主体的に関わり続ける」と定義づけられ、この定義は早期に父親の役割を獲得する支援に活用出来ると考えられた。

受付日：2019年9月25日 受理日：2019年12月19日

1) 兵庫医療大学 看護学部 公衆衛生看護学領域

2) 大阪府立大学大学院 看護学研究科

I. 緒言

わが国では、近年急激な核家族化が進み、今や「夫婦のみの世帯」もしくは「夫婦と未婚の子のみの世帯」が全世帯の約53%（厚生労働省，2019）を占め、約67%（労働政策研究・研修機構，2019）の世帯が共働き世帯である。それに加え、子育て世代においては地域との関係の希薄化も進んでいる（ベネッセ教育総合研究所，2016）。

少子高齢化という言葉が言われてしばらく経つが、出生数は減少の一途をたどり、平成30年の出生数は推計で92万1000人（厚生労働省，2019）である。少子化対策に関するプランの制定や子育て支援制度の充実など、様々な施策が打ち出され実施されてきたが出生数が減り続ける状況は変わらず、次なる少子化対策の一手として国に注目されたのが父親の育児参加である（松島，2015）。

日本の男性の仕事中心な生き方は1990年代のバブル崩壊を境に揺らぎ始めた（多賀，2011）。男女共同参画社会基本法が1999年に施行されると、女性の社会進出と合わせて男性の家庭進出が社会のテーマとして取り上げられるようになり、「男は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方に対して、2009年に男性の反対意見が賛成意見を上回った（内閣府男女共同参画局，2019）。また、2010年にはイクメンプロジェクトがスタートし、男性の育児参加が社会の中で訴えられるようになり、父親自身も育児役割行動をする意識は高まりつつある（デッカーら，2015）。

しかしながら、父親の育児への参加という部分に関しては未だ変化がなく、先進国では最低水準である（厚生労働省，2017）。厚生労働省は2012年に父親の役割とは何かを含めた「父親のワーク・ライフ・バランス ハンドブック」（厚生労働省，2012）を出したが、実際は多くの父親が子育てに参加する必要性を理解しながらも企業と家族との板挟みの中で自分の父親としての役割とは何かに悩み、葛藤している（おおた，2016）。父親を支援し、より育児参加を促進するためには、父親役割の獲得に向けた支援が必要であり、社会と家庭の中で変化してきた現代の父親の役割を定義づけることが必要である。

そこで、本研究では「父親の役割」という概念が現代ではどのように用いられているのかを明らかにし、その特徴と父親の役割獲得に向けた支援への概念活用の有用性を検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. データ収集方法

本研究の対象となる文献は、日本の文献だけでなく、日本の現在の父親の役割に関する議論が北米および欧州の影響を受けている（Michael et al, 2010）ことから、北米および欧州の父親の役割について述べられている海外文献も対象とした。英文献をCINAHL, PubMedのデータベースを使用して検索し、和文献を医中誌Web, CiNii, Google scholarのデータベースを使用して検索した（2017年8月18日）。キーワードは「Father」と「role」, 「父親」と「役割」をそれぞれ検索し、検索条件は「Original article」および「原著論文」とした。男女共同参画が言われ始めた1990年代後半以降、新たな父親の役割が再構築されている（岡田，2009）ため、本研究の目的と照らし合わせ、検索の範囲をその契機となった男女共同参画審議会が設置された1997年から20年間とした。

検索の結果、256件を抽出した。その中から重複文献および本研究の目的に沿わない文献（研究対象が病児、障害児、父子家庭等であるもの）を除き、Rodgers et al. (2000) の30文献または全文献の20%をランダムサンプリングする方法を参考に、後者を採用して45文献を対象とした。45文献の内訳は英文献12件、和文献32件であり、看護学14件、保健学6件、教育学5件、家族社会学4件、人間科学3件、心理学2件、育児学2件、社会関係学1件、生活科学1件、家族心理学1件、社会学1件、ジェンダー学1件、発達心理学1件、保育学1件、バイオメディカル1件であった。

2. 分析方法

本研究の概念分析における対象概念は「父親の役割」である。概念分析の手法は、対象概念が時間の経過や状況に合わせて変化するという前提に立ったものであるため、Rodgersの概念分析法を用いた。この手法を用いて分析対象の文献を「父親の役割」という用語の文脈における使われ方に着目しながら精読した。データシートを作成し、概念の特徴を構成する属性、概念に先だって生じる先行要件、概念に後続した結果として生じる帰結に関する記述を抽出した。抽出された内容は、それぞれの項目にまとめ、内容を分析しカテゴリー化を行った。そして、これらをもとに概念を定義づけた。また、定義づけた概念についてより理解を深める為、著者の父親支援における実践例から

モデルとなるケースを示す。

尚、分析の過程においては、概念分析の指導経験がある専門家からスーパーバイズを受け、妥当性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

本研究は文献を対象とした概念分析法であるため、著作権、盗用、剽窃などの倫理問題に関する

「出版・公表に関する倫理」を遵守した。

Ⅲ. 結果

対象となる45文献を精読し、属性、先行要件、帰結をそれぞれ抽出したうえで「父親の役割」を定義づけた。以下、カテゴリーを【 】, 内容を< >で示す。

表1 「父親の役割」の属性

カテゴリー	内容	文献
歴史的な社会変化への応答	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭や社会の状況の変化に応じてフレキシブルに役割を変化させる ・存在者としての父親に関する役割の歴史的变化を認識する ・社会における存在として求められる父親の役割に回答する 	(寺岡, 2005) (川井ら, 2008) (石井, 1997) (船橋, 1998) (平川, 2004) (William et al., 2004) (James et al., 2015) (Iwata H., 2003)
家族システムへの働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・家族システムにおけるリーダーシップの発揮 ・子どもの誕生における家族の再調整と絆の強化 ・家族が生活する収入を得てくる ・家族を守る 	(中富ら, 2011) (桑名ら, 2006) (内田ら, 2012) (黒澤, 2009) (William et al., 2004) (James et al., 2015)
父親としての葛藤の調整	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭役割と仕事役割の二分構造で葛藤しながらそれを調整する ・自分の父親や周囲の父親の影響を受け、父親像を修正する ・性役割分業の揺らぎと父親像の揺らぎに葛藤し、調整する ・父親は育児の役割を果たすべきであるが、同時に労働という役割にも参加し続ける必要がある 	(森下, 2012) (Katarina et al., 2014) (臼井ら, 2001) (多賀, 2005)
夫婦関係における寄り添いと協働	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てにおける責任を妻と共有する ・妻とコミュニケーションをとり、よき仲間、良き相談相手、良き理解者になる ・子どもの育児について妻と話し合う ・父親も家事と育児に参加し協働する ・そばで妻の精神的ケアを行い、励まし続ける ・人間としてケアも仕事も妻と分かち合う 	(石井, 1997) (岩田ら, 1998) (磯山, 2015) (Lengu et al., 2011) (鍋島ら, 2015) (内田ら, 2012) (船橋, 1998) (川井ら, 2008) (Nigel et al., 2011) (Gisela et al., 2010) (Hollander D., 1997)
父子関係における主体的な関わりと責任	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに対して責任を負う ・主体的に子どもと関わる ・子どもとの時間を確保する ・子どもに知識や技術を与える ・子どもの世界観を広げるためのガイドをする ・子どもの情緒的なサポートをする ・子どものことを知ろうとする ・子どもたちを守り、安心と安全を与える ・子どもにとってのかけがえのない存在、モデルであり関わり守る 	(Higham et al., 2012) (Jean et al., 2006) (James et al., 2015) (Jennifer et al., 2014) (前徳, 2003) (川井ら, 2008) (Ngu et al., 2011) (Suize et al., 2015) (Iwata H., 2003)

1. 属性

「父親の役割」が有する特性は、【歴史的な社会変化への応答】【家族システムへの働きかけ】【父親としての葛藤の調整】【夫婦関係における寄り添いと協働】【父子関係における主体的な関わりと責任】の5つのカテゴリーがみられた(表1)。父親は【歴史的な社会変化への応答】をしながら、【家族システムへの働きかけ】を行い、【父親としての葛藤の調整】を経験しながらも、家族システムの下位システムであるそれぞれのサブシステムに対して、【夫婦関係における寄り添いと協働】【父子関係における主体的な関わりと責任】という役割を果たしていた。

1) 【歴史的な社会変化への応答】

このカテゴリーの特徴は、歴史的な時系列にお

いて家族や社会の中で変化する父親への要請に対して応答していくという属性であった。その中でも特徴的な内容が<家庭や社会の状況の変化に応じてフレキシブルに役割を変化させる>であった。父親たちは社会や家庭の中における<存在者としての父親に関する役割の歴史的变化を認識>しながら<求められる父親の役割に回答する>必要があった。

2) 【家族システムへの働きかけ】

このカテゴリーの特徴は、家族システム全体に対して<リーダーシップを発揮>しながら<子どもの誕生における家族の再調整と絆の強化>を行うという属性であった。また、その役割を果たしながら<家族が生活する収入を得てくる><家族を守る>という役割を担っていた。

3) 【父親としての葛藤の調整】

このカテゴリーの特徴は、父親として育児と仕事の両方の役割を果たそうと葛藤しながらも調整し、自己形成した父親像の修正を行うという属性であった。それぞれに特徴的な内容が＜家庭役割と仕事役割の二分構造で葛藤しながらそれを調整する＞＜自分の父親や周囲の父親の影響を受け、父親像を修正する＞であった。＜性役割分業の揺らぎと父親像の揺らぎに葛藤し、調整する＞という内容にあるように、どちらの面でも父親としての自分自身に対する葛藤を抱くが、父親の役割を遂行していくにあたってはこの役割葛藤に対して向き合い、調整していた。

4) 【夫婦関係における寄り添いと協働】

このカテゴリーの特徴は、＜子育てにおける責

任を妻と共有＞し、＜コミュニケーションを取り＞ながら＜家事と育児に参加し協働する＞という属性であった。また、協働していくために＜妻の精神的ケアを行い、励まし続ける＞という役割も担っていた。

5) 【父子関係における主体的な関わりと責任】

このカテゴリーの特徴は、＜子どもに対して責任を負い＞ながら＜主体的に子どもと関わる＞ための＜時間を確保＞し、あそびなどを通じて＜子どもに知識や技術を与え＞たりして＜子どもの世界観を広げるためのガイドをする＞という属性であった。また、＜子どもの情緒的なサポート＞などを通じて＜子どものことを知＞ったり、＜安心と安全を与える＞役割も担っていた。

表2 「父親の役割」の先行要件

カテゴリー	内容	文献
父親としての社会からの要請	・父親としての存在が社会に必要とされている	(Iwata H.,2003)
家族システムにおける父親の存在	・子どもの誕生により生物学的に父親になる ・婚姻により血は繋がらないが親になる ・家族内に父親を含めたシステムが存在する	(田辺, 2005)(勝見, 2014)(Iwata H.,2003)
父親としての自覚	・自分なりの父親としての自己像の形成 ・男性は五感で感じ取れる状況において父親であると自己認識している ・子どもの誕生により父親に親としての意識が芽生える ・子どもの誕生により喜びと同時に父親としての責任を自覚する	(森田ら, 2010)(桑名ら, 2006)(大浦ら, 2007) (佐々木, 2009)(澤紙ら, 2014)

2. 先行要件

「父親の役割」という概念に先だって生じる先行要件は【父親としての社会からの要請】【家族システムにおける父親の存在】【父親としての自覚】という3つのカテゴリーがみられた(表2)。父親が役割を遂行していくためには、その基盤となる【父親としての社会からの要請】と、妻や子どもを含めた【家族システムにおける父親の存在】が必要であった。また、父親として役割を遂行するには、自身が父親であるという【父親としての自覚】という自己認知も必要であった。

1) 【父親としての社会からの要請】

このカテゴリーは、＜父親としての存在が社会に必要とされている＞という内容で構成されていた。社会の中で父親という存在が必要とされていなければ父親としての役割が果たせないことを示す。

2) 【家族システムにおける父親の存在】

このカテゴリーは、＜子どもの誕生により生物学的に父親になる＞＜婚姻により血は繋がらないが親になる＞＜家族内に父親を含めたシステムが存在する＞という内容で構成されていた。生物学的もしくは法的に父親となり、家族システム内に父親が存在することが父親の役割を遂行するのに必要であった。

3) 【父親としての自覚】

このカテゴリーは、＜自分なりの父親としての自己像の形成＞や＜五感で感じ取れる状況において父親であると自己認識し＞たり、子どもの誕生によって＜親としての意識が芽生え＞、＜喜びと同時に父親としての責任を自覚＞したりするなど、父親の役割を遂行するために必要な父親としての自覚を表していた。

3. 帰結

表3 「父親の役割」の帰結

カテゴリー	内容	文献
子どもの成長発達の促進	<ul style="list-style-type: none"> ・父子の関わりが子どもの社会化を促進する ・子どもの社会的発達に影響を与える ・子どもの運動面の発達に影響を与える 	(鍋島ら, 2015)(加藤ら, 2002)(William.,2004)
妻のウェルビーイング	<ul style="list-style-type: none"> ・妻の抑うつ傾向を予防する ・妻の心理的健康度を高める ・育児ストレスを軽減する 	(小林, 2008)(西出ら, 2011)(菅原, 2002)
父親自身のウェルビーイング	<ul style="list-style-type: none"> ・父親自身の主観的幸福度が高まる 	(黒澤,2009)
家族の機能と関係性の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・父親の育児家事行動が夫婦関係満足度に影響する ・男性の父親役割の質が夫婦関係の質を高める ・子どもとの直接的な相互作用によって良好な父子関係を築く ・父親が家族とよくかかわることで母子関係が良好になる ・父親が子育てに積極的かつ家族員がそれに納得している場合に家族の凝集性が向上する 	(福丸, 2000)(加藤, 2002)(内田, 2012) (宮崎ら, 2007)
父親としての発達	<ul style="list-style-type: none"> ・生活や役割の変化を経験して適応する ・子どもの世界を尊重できるようになり、育児を肯定的に捉えられるようになる ・父親としての発達の变化 ・家族の役割期待を認知し、マネジメントできるようになる 	(中村, 2011)(加藤, 2002)(岩田ら, 1998) (Jennifer et al.,2006)

「父親の役割」を遂行した結果として生じる帰結は【子どもの成長発達の促進】【妻のウェルビーイング】【父親自身のウェルビーイング】【家族の機能と関係性の向上】【父親としての発達】という5つのカテゴリーがみられた(表3)。父親が役割を果たすことで【父親としての発達】をしつつ、【子どもの成長発達の促進】や【妻のウェルビーイング】が得られるだけでなく【父親自身のウェルビーイング】も得られ、【家族の機能と関係性の向上】に寄与していた。

1) 【子どもの成長発達の促進】

このカテゴリーは、父親が役割を遂行することで子どもの<社会化を促進し>、<社会的発達に影響を与え>たり、<運動面の発達に影響を与える>という結果を表していた。

2) 【妻のウェルビーイング】

このカテゴリーは、父親が役割を遂行することで<妻の抑うつ傾向を予防>したり、<妻の心理的健康度を高め>たり、<育児ストレスの軽減>という妻のウェルビーイングが得られるという結果を表していた。

3) 【父親自身のウェルビーイング】

このカテゴリーは、父親が役割を遂行することで、<父親自身の主観的幸福度が高まる>という結果を表しており、心理的な父親自身のウェルビーイングが得られるという特徴を有していた。

4) 【家族の機能と関係性の向上】

このカテゴリーは、父親が役割を遂行することで家族機能が向上したり、それぞれの関係性が向上するという結果を示していた。夫婦の関係性においては<父親の育児家事行動が夫婦関係満足度に影響し>たり、<父親役割の質が夫婦関係の質を高める>ことが示された。父子関係においては<子どもとの直接的な相互作用によって良好な父子関係を築く>という結果を示していた。また間接的な結果として<父親が家族とよくかかわることで母子関係が良好になる>ということも示された。更に、それぞれの関係性だけでなく<父親が子育てに積極的かつ家族員がそれに納得している場合に家族の凝集性が向上する>という家族機能の向上につながるという結果も示された。

5) 【父親としての発達】

このカテゴリーは、父親が<生活や役割の変化を経験して適応し>ていくことで<子どもの世界を尊重できるようになり、育児を肯定的に捉えられるようになる>などの<父親としての発達の变化>を経験し、<家族の役割期待を認知し、マネジメントできるようになる>という、父親としての発達という結果を示していた。

4. 定義

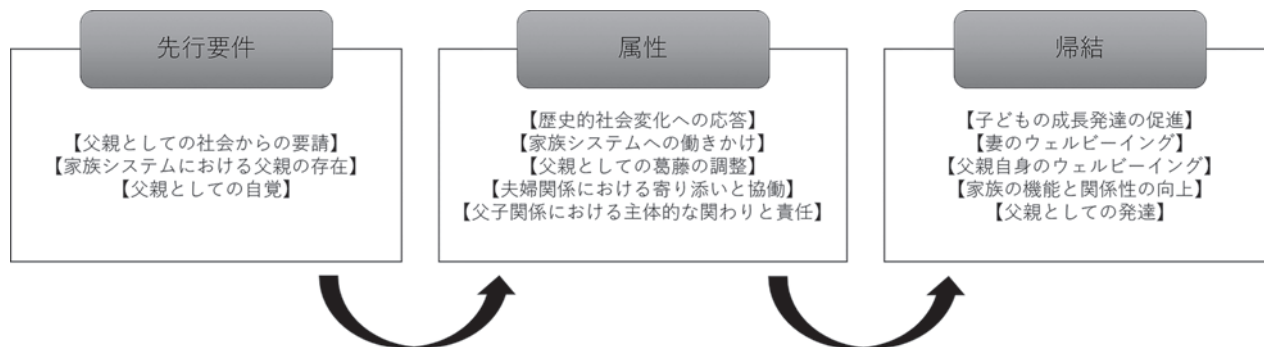


図1 「父親の役割」の概念図

概念分析の結果(図1)を受け、本研究では父親の役割を《家族システム内に存在する夫婦関係や父子関係に対し、社会の要請にも応答しつつ、父親として葛藤しながらも責任を持って主体的に関わり続ける》と定義づけた。その役割を遂行することによって得られる帰結は《父親として発達し、子どもの発達の促進だけでなく、妻や父親自身の健康や幸福が得られ、家族全体の関係性や機能が向上する》であった。

5. モデルケース

本概念の理解を深めるために著者の父親支援における実践例から事例を示す。

Aさん30代男性。今までは仕事メインの生活をしてきたが、子どもが生まれたのを機に、イクメンブームの波に乗り父親としての役割をよく考えるようになった。今まで通り仕事に励みつつも、積極的に家事育児に参加することが重要だと考え、祖父母も含めて調整を行った。

Aさんは子育てにおける責任を妻と共有したいと思い、積極的にコミュニケーションを取りながら、子育てをどうしていきたいかを話し合った。その際に、これからの子育ての不安や日々の育児における疲れなどが妻から語られたときは、それを受け止め、気持ちに寄り添った。

その後もAさんは仕事と家庭での役割を上手くこなそうとするが、家庭での役割と仕事での役割を並行して行うことで、次第に疲れてきてうまくいけなくなった。その際、育児は重要であると思いつつも、やはり仕事でも成果を出さなければいけないという葛藤がAさんを襲っていた。Aさんはこの葛藤に向き合い、どうすれば上手く仕事と家庭を両立できるのかを考え、日々の仕事や家庭での役割を見直し、調整するようになった。

子どもが生まれて間もなくはどうかかわって

いかかわらなかつたが、それでも子どもと触れ合える時間を確保し、積極的に育児に取り組んでいた。子どもが少しずつ大きくなるにつれて、Aさんはいろんな場所へ子どもを連れて行き、いろんな景色やモノを見せたり、自然に触れ合わせたりして、子どもの感受性を伸ばそうとした。

IV. 考察

1. 「父親の役割」の概念の変遷と特徴

本研究の目的である「父親の役割」という概念が現代ではどのように用いられているのかを明らかにするために、新たな父親の役割を考える契機となった男女共同参画審議会が設置された1997年以前の父親役割について述べられている文献と比較しながらその変化と特徴について考察する。かつて日本では父親たちによって育児がなされていた(汐見, 2003)。江戸時代の下級武士の日記や尋常小学校の修身の教科書からも父親が育児をしている姿が読み取れる(太田, 2017; 中里, 1994)。その後、戦争や高度経済成長などで父親不在の家庭が多くなり、「男性は社会で仕事をする、女性は家の仕事をする」という性別役割分業意識が強くなった(景光, 2015)。父親の不在が当たり前になる中で、日本は「母性社会」(河合, 1976)になり、子育ては主に母親が担うものとされ、男は仕事という性別分業的役割が父親の性的固有役割となった(猪野, 1994)。これは本研究においても【家族システムへの働きかけ】に「<家族が生活するための収入を得る>」という内容で、父親の役割の属性に見られていると考えられる。しかしながら、Joivet (1997)の日本の子育て期における母親の危機に関する報告の中で、高度経済成長期の終わりと同時に新しい男性像が議論され始め、家庭での男性の役割の在り方について考

え始められているとあるように、男は仕事という性別分業的役割は、1990年代後半に男性の雇用の不安定化などの社会的変化と共に標準ではなくなった(釜野, 2013)。また、現代日本は共働きの時代に突入し、約67%の世帯が共働き世帯であり(労働政策研究・研修機構, 2019)、多くの母親が就労している。母親たちが仕事という役割を担うようになってきている社会において、稼ぐだけの父親は正当性を失っており、父親たちの性別役割分業意識と担っている役割が多様化してきている(小笠原, 2009)。今回の概念分析で抽出された属性それぞれは、その多様化している父親の役割を示していると考えられる。社会の変化と密接にあった父親は【歴史的社会変化への応答】という役割を担うようになっており、かつての役割であった稼ぎ手の役割と求められる家庭での役割という<二分構造で葛藤しながらそれを調整する>という内容は、多様化してきている父親の役割への葛藤であるとも考えられる。

本研究では【家族システムへの働きかけ】【夫婦関係における寄り添いと協働】【父子関係における主体的な関わりと責任】という家族内の関係性における父親の役割が属性として導き出されている。特に夫婦関係、父子関係はそれぞれに父親としてどのようにかわるべきかの内容からカテゴリーが導き出されている。これらは特に現代で求められている父親の役割であることが上記からもわかる。また、このように家庭での役割が求められるようになり、父親として仕事だけでなく、多くの役割を担うようになってきているため(Katarina et al., 2014)、<家庭役割と仕事役割の二分構造で葛藤しながらそれを調整する>や<性別役割分業の揺らぎと父親像の揺らぎに葛藤する>というような、父親としての葛藤と調整という役割があるというのも現代の父親の役割の概念的特徴であった。

本研究では海外と日本の文献を使用し、概念分析を行った。海外と日本の文献において、分析の結果出てきた内容を比較すると、その違いに特徴があった。海外文献では「父親の役割」における特徴を示す属性に関するものが検討されており、日本の文献では「父親の役割」を遂行することによる帰結の説明部分で使われている傾向にあった。例えば、日本の文献では父親が子どもに関わることによって社会性の発達を促される(鍋島, 2015)ことがわかっている。逆に、海外文献では、子どもの社会性を発達させるために、父親は愛情の供給と自己肯定感の育成に携わる(Jean,

2006)などのように、父親が果たす役割の中身について検討されているという違いが見受けられた。我が国において、父親として家庭での役割が求められている現代においては、今後わが国でも父親の担う役割の特徴についての研究がより必要である。

2. 概念の活用について

役割とは「地位に結びついた、期待される行動様式のこと」と定義されている(森岡ら, 1997)。森岡ら(1997)の役割モデルによると、役割を遂行するためには、期待されている行動様式を知る必要があるが、これに<存在者としての父親に関する役割の歴史的变化を認識>しながら<求められる父親の役割に応答する>という部分があてはまる。父親の役割が多様化してきている現代では、自分の役割認知と合わせて社会規範や妻や子どもが父親にどのような役割を期待するのかという役割期待を知ることが重要になってきていると考えられる。この役割モデル(森岡ら, 1997)にあてはめながら父親役割について考える際に、本研究結果は重要な資料となり得る。つまり、父親の役割を考えるための支援や父親自身が父親の役割を検討し、結晶化していく段階での反省において活用できる。それにより、早期に父親役割を獲得する支援につなげることが出来ると考えられる。

最近では、父親役割獲得を促すためのシステムティックな父親同士の交流の場の提供や、父親になる夫に対する教育・立ち会い出産の導入が有用である(磯山, 2015)ことなどが示唆されており、両親学級などにおいて父親役割を取得するプロセスに注目した、父親への支援の方略が検討されている(木越ら, 2006)。その代表的なものが、現在新たなイクメンプロジェクトの事業の1つとしてスタートしている「イクメン2020(フレフレ)キャンペーン」(厚生労働省, 2019)である。このキャンペーン内容の一つに「両親学級×男性育休」がある。この両親学級では父親の役割、心構え、育児知識などの内容を含む講座が行われている(厚生労働省, 2019)。今後もこのキャンペーンのような、父親の役割について取り上げた両親学級や父親学級が検討されると考えられるが、そういった父親の役割とは何かを検討する機会の中で、本研究結果の「父親の役割」という概念を活用することは有用であると考えられる。

V. 本研究の限界と課題

本研究は、Rodgers et al. (2000) の30文献または全文献の20%をランダムサンプリングする方法を参考に、後者を採用して45文献を対象としているため、網羅的に文献を精読できていない。したがって、今後今回取り上げていない文献に関しても精読し、今回の結果と比較検討していく必要がある。

また、本研究では病気や障害を持つ子どもの父親や父子家庭に関する文献は対象外にしているため、明らかになった父親の役割の定義の使用には限界がある。医療的ケア児への支援や多様化してきている社会を考えると、これらの父親がどのように役割を担っているのかも明らかにする必要があり、いろいろな視点から父親の役割とは何かを今後検討していくことが課題である。

VI. 結語

本研究の概念分析により、「父親の役割」は《家族システム内に存在する夫婦関係や父子関係に対し、社会の要請にも応答しつつ、父親として葛藤しながらも責任を持って主体的に関わり続ける》と定義づけられた。この定義は父親の役割を考えるための支援や父親自身が父親役割を検討し、結晶化していく段階での反省において活用できる概念であり、早期に父親の役割を獲得する支援に活用出来ると考えられた。

引用参考文献

- デッカー清美, 丸山昭子 (2015) : 父親認識に関する文献研究. 日本農村医学会雑誌, 64(4), 718-724.
- 福丸由佳 (2000) : 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連. 家族心理学研究, 14(2), 151-162.
- 船橋恵子 (1998) : 育児休業制度のジェンダー効果—北欧諸国における男性の役割変化を中心に—. 家族社会学研究, 10(2), 55-70.
- Gisela, K., Margareta, E. (2010) : The Development of Relational Competence Among Young High-Risk Fathers Across the Transition to Parenthood. *Health Care for Women International*, 31, 621-635.
- Higham, S., Davies, R. (2012) : Protecting, providing, and participating: fathers' roles during their child's unplanned hospital stay, an ethnographic study. *Journal of Advanced Nursing*, 69(6), 1390-1399.
- 平川真代 (2004) : 父親の育児参加と家族関係—父親自身の父子関係からの視点—. 家族社会学研究, 15(2), 52-64.
- Hiroko, I. (2003) : A Concept Analysis of the Role of Fatherhood: A Japanese Perspective. *Journal of*

- Transcultural Nursing*, 14(4), 297-304.
- Hollander, D. (1997) : Teenage fathers may play larger role in child care than is often thought. *Family Planning Perspectives*, 28(2), 85-87.
- 猪野郁子 (1994) : 夫は妻の育児感情をどう認識しているのか. 日本家政学会誌, 45(11), 999-1004.
- 石井クンツ昌子 (1997) : 現代アメリカのジェンダーと家族研究—結婚, 家事労働, 母親と父親の役割についての考察—. *社会関係研究*, 3(1), 105-127.
- 磯山あけみ (2015) : 勤務助産師が行う父親役割獲得を促す支援とその関連要因. *日本助産学会誌*, 29(2), 230-239.
- 岩田裕子, 森恵美, 前原澄子 (1998) : 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因. *日本看護科学会誌*, 18(3), 21-36.
- James, G. L., Debra, R. W., Thabo, T. F. (2015) : Historical Role of the Father: Implications for Childbirth Education. *International Journal of Childbirth Education*, 30(1), 12-18.
- Jean, A. S., Kimberly, B., Rachel, F. S., et al. (2006) : The Meaning of "Good Fatherhood" Low-Income Fathers' Social Constructions of Their Roles. *Parenting: Science and Practice*, 6(2), 145-165.
- Jennifer, M., Jill, C., Anna, W. (2014) : Keeping the family together and bonding: a father's role in a perinatal mental health unit. *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 32(4), 340-354.
- Jolivet, M. (1997) : *Japan, the Childless Society? The Crisis of Motherhood*. Routledge, London.
- 景光正明 (2015) : 家族と社会の未来を創る育児性を身につける指導の工夫. 沖縄県立総合教育センター 研究収録, 58, 1-11.
- 釜野さおり (2013) : 1990年代以降の結婚・家族・ジェンダーに関する女性の意識の変遷—何が変わって何が変わらないのか—. *人口問題研究*, 69(1), 3-41.
- 加藤邦子, 石井クンツ昌子, 牧野カツコ 他 (2002) : 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から. *発達心理学研究*, 13(1), 30-41.
- 加藤邦子 (2009) : 育児期の父親が子どもとの関係性を高める要因—フォーカス・グループ・インタビューの質的分析—. *Proceedings*, 8, 23-35.
- 勝見吉彰 (2014) : ステップファミリーにおける親子関係に関する研究—子どもの視点からの検討—. *人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌*, 14(1), 129-136.
- Katrina, M., Orla, M. (2014) : Father Identity, Involvement and Work-Family Balance: An In-depth Interview Study. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 24(5), 1-15.
- 河合隼雄 (1976) : *母性社会日本の病理*. 中央公論社, 東京.
- 川井尚, 安藤朗子, 武島春乃 他 (2008) : 父親の役割に関する基礎的研究—母親の役割とも比較して—. *日本子ども家庭総合研究所紀要*, 42, 177-190.
- 木越郁恵, 泊裕子 (2006) : 周産期における夫の父親役割獲得プロセス. *家族看護学研究*, 12(1), 32-38.
- 小林佐知子 (2008) : 乳幼児をもつ母親のソーシャル・サポートと抑うつ状態との関連. *小児保健研究*, 67(1), 96-101.
- 厚生労働省 (2016) : *父親の仕事と育児両立読本*. 厚生労働省, 東京.

- 厚生労働省 (2012) : 父親のためのワーク・ライフ・バランス ハンドブック
- 厚生労働省 (2017) : 日本の一日, 2019. 6.12, <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16-3/dl/02.pdf>.
- 厚生労働省 (2019) : 平成30年人口動態調査 年間推計, 2019. 8.20, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei16/index.html>.
- 厚生労働省 (2019) : 平成30年国民生活基礎調査, 2019. 8.20, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>.
- 黒澤泰 (2009) : 父親役割意識と父親の育児行動の一致・不一致が精神的健康に与える影響. 応用心理学研究, 34(1), 48-49.
- 桑名行雄, 桑名佳代子 (2006) : 1歳6か月児をもつ父親の育児ストレス—親役割認知および性別役割態度との関連—. こころの健康, 21(1), 42-54.
- 前徳明子 (2003) : 育児における絵本の意識と父親の役割—母親との比較を通して—. 小池学園研究紀要, 2, 41-52.
- Michael E. L., et al. (2010) : The Role of The Father in Child Development 5th. Wiley, New Jersey.
- 宮崎正明, 富永ちはる (2007) : 父親の子育て態度と家族システムに関する研究 : FACESIⅢでみる現代家族の特徴. 長崎大学教育学部紀要, 71, 23-38.
- 森岡清美, 望月嵩 (1997) : 新しい家族社会学—四訂版—. 培風館, 東京.
- 森下葉子 (2012) : 仕事と家庭間で生じる役割間葛藤と父親の発達との関連—共働き家庭の父親の場合—. 文京学院大学人間学部研究紀要, 13, 155-165.
- 森田亜希子, 森恵美, 石井邦子 (2010) : 親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった妻の妊娠期における体験. 母性衛生, 51(2), 425-432.
- 内閣府男女共同参画局 (2019) : 男女共同参画白書 令和元年版. 内閣府男女共同参画局, 東京.
- 鍋島和貴, 山口求, 武内龍伸 (2015) : 父親の育児参加と幼児期子どもの社会性の発達に関する研究. 藍野学院紀要, 28, 41-53.
- 中村真弓 (2011) : 育児と女性のライフコース. 尚綱学園研究紀要 人文・社会科学編, 5, 1-19.
- 中富利香, 高田哲 (2011) : 極低出生体重児を出生した家族における父親の役割形成とその関連要因. 小児保健研究, 70(2), 238-244.
- 中里英樹 (1994) : 国定修身書における二つの家族像. 京都社会学年報, 1, 13-29.
- Ngu, L., Florsheim, P. (2011) : The Development of Relational Competence Among Young High-Risk Fathers Across the Transition to Parenthood. Family Process, 50, 184-202.
- Nigel, S., Valerie, H. (2011) : Engaging and supporting fathers to promote breast feeding : a new role for Health Visitors? Caring Science, 25, 467-475.
- 西出弘美, 江守陽子 (2011) : 育児期の母親における心の健康度 Well-being に関する検討. 小児保健研究, 70(1), 20-26.
- おおたとしまさ (2016) : 父親たちの葛藤. PHP 出版, 東京.
- 太田泰子 (2017) : 江戸の親子—父親が子どもを育てた時代—. 吉川弘文館, 東京.
- 大浦梨々子, 松田かおり, 眞鍋えみ子 (2007) : 初妊婦を持つ男性の親としての変化と家事育児行動との関連. 京都母性衛生学会誌, 15, 35-40.
- 小笠原 祐子 (2009) : 性別役割分業意識の多元性と父親による仕事と育児の調整. 家計経済研究, 81, 34-42.
- 岡田みゆき (2009) : 男女共同参画社会における父親の家庭役割. 日本家庭科教育学会誌, 52(1), 18-34.
- Rodgers B. L., Knafk K. A. (2000) : Concept Development in nursing (2ed). Saunders, Philadelphia.
- 佐々木裕子 (2009) : はじめて親となる男性の父親役割適応に影響する要因. 母性衛生, 50(2), 413-421.
- 澤紙千晶, 小西清美, 長嶺絵里子 他 (2014) : 乳幼児を持つ父親の家事・育児への意識と役割行動. 沖縄の小児保健, 41, 45-48.
- 菅原ますみ, 八木下暁子, 託摩紀子 他 (2002) : 夫婦関係と児童期の子どもへの抑うつ傾向との関連. 教育心理学研究, 50(2), 129-140.
- Suzie, S., Dale, S., Karen, M. (2015) : Does antenatal education prepare fathers for their role as birth partners and for parenthood?. British Journal of Midwifery, 23(5), 336-342.
- 汐見稔幸 (2003) : おーい父親 Part 1 —子育て篇—. 大月書店, 東京.
- 多賀太 (2005) : 性別役割分業が否定される中での父親役割. フォーラム現代社会学, 4, 48-56.
- 多賀太 (2011) : 揺らぐ労働規範と家族規範—サラリーマンの過去と現在. ミネルヴァ書房, 東京.
- 田辺昌吾 (2005) : 乳幼児の父親がもつ「父親になった」実感とその関連要因. 生活化学研究誌, 4, 1-12.
- 寺岡聖豪 (2005) : 父親研究の動向. 教育実践研究, 6, 53-60.
- 内田利広, 高橋はづき (2012) : 家庭における父親役割が子どもの母子密着及び心理的自立に与える影響. 京都教育大学紀要, 121, 141-157.
- 上村智子, 本田多美枝 (2006) : 概念分析の手法についての検討—概念分析の主な手法とその背景—. 日本赤十字看護学会誌, 6(1), 94-102.
- 白井雅美, 渡辺節子 (2001) : 父性性に関する研究—既婚男性の性別役割観の特徴と父性性に影響を及ぼす父子関係との関連について—. 母性衛生, 42(2), 360-367.
- William, L., Coleman, Craig, G. (2004) : Fathers and Pediatricians: Enhancing Men's Roles in the Care and Development of Their Children. PEDIATRICS, 113(5), 1406-1411.